

論文内容の要約

論文名	Reduction of Small Fibers of Thoracic Ventral Roots and Neurons of Intermediolateral Nucleus in Parkinson Disease and Dementia with Lewy Bodies
氏名	初田 裕幸
<p>【目的】多系統萎縮症(MSA)における起立性低血圧(OH)の主な原因は、中間質外側核(IML)の変性によるとされている。パーキンソン病(PD)やレビー小体型認知症(DLB)の自律神経障害は交感神経節前・節後ニューロンの両方の障害により生じるとされるが、節前ニューロンの障害の報告は少なく、明らかにされていない。IMLの神経細胞数および節前線維が多数を占めるとされる脊髄前根の径3μ以下の有髄線維(FF)を計測することにより、節前ニューロン障害の程度について明確にした。</p> <p>【対象】正常コントロール(NC)17例(平均78.6歳; 男:女=10:8)およびPD 18例(83.8歳;11:7)、DLB 15例(82.2歳;8:7)、MSA 9例(73.0歳;3:6)を対象とした。</p> <p>【方法】第12胸髄のパラフィン包埋6μm厚切片のKlüver-Barrera染色および同レベル前根のエポン包埋準薄切片トルイジン青染色標本を作製し、IMLの神経細胞数および前根の有髄線維の径とその密度を算出した。</p> <p>【結果】IML細胞数やFFの密度は、NCに対し、PDで53%、67%、DLBで47%、71%、MSAで27%、42%と有意に減少していた。PD/DLB計33例のうち、OHあり12例はOHなし21例に対し、IML神経細胞数は77%に減少していた。FFの密度はOHなし、OHありでNCの74%、59%に減少していた。有髄線維の小径($<6\mu$m)/大径($\geq 6\mu$m)比の平均は、NC(3.17)に対し、OH-(1.58)では有意差はないが、OH+(1.18)において有意に低下している。</p> <p>【結論】PDやDLBにおいて、節前ニューロン及び節前線維は有意に減少しており、起立性低血圧の責任病巣の一つである可能性がある。</p>	